

## シンポジウム「天気予報の現状と将来」に出席して（感想）

古橋重利\*

天気予報の表現は、昔も今もあまり変わらない。しかし、予報を作り出す過程に計算機が入り、客観的に生み出された天気図や資料が、その領域を広げつつある。その事が天気予報の将来にどのような影響を及ぼすのか、現状分析から始まって、その延長線上を推論する試みは、誠に時宜を得たものであり、気象庁に所属する会員はもとより、一般の会員にとっても、非常に興味のある事であった。

このシンポジウムを企画した人達が、講演順序に工夫をこらし、一連の思考の流れを十分に計算して、天気予報の将来と、それに伴うシステムの変化にまで言及した事により問題の多様な側面をのぞかせた。しかし一方では、天気予報に内在している様々な問題を一度に浮き彫りにして見せたために、講師が何を最も強調しようとしたのか理解できなかったところもあった。今後さらに問題をしばって、継続的にこの種の会を催されるよう希望したい。

関西支部から、今回のシンポジウムに私が代表として出席するよう指名されたので、大阪管区气象台や京都地方气象台で開かれた予報談話会で、同じ題目の討論会を開いた。多くの会員が出席して熱心な提言があった。その中で代表的なものとして、(1) レーダに20年、数値予報に10年の歴史がある。これ等が予報に影響した度合いを考えると、今後10年位は現状の延長線上にあって、天気予報も、これに伴うシステムも画期的に変わることは考えられない。外部からの要請とか、制度変更等の理由で変わる場合は別として、直線的な変化はあっても、不連続的な変化はないだろう。また、数値予報でいえば、理論的に確立していない問題がまだ多く残されている。客観予報には限界があり、実況との間の誤差もあるので、予報官による修正や判断もまだ必要とするだろう。(2) システム化の関係で、電計依存の方向に向かわざるを得ないだろう等たくさんの意見が述べられた。これらの事を限られた時間内に、誤解なしで講師に伝える事は

無理なので、あらかじめ意図したような質問ができなかった。それにしても、各講師の主張は多方面にわたり、十分に準備されたものである事を感じさせた。総括的には、将来24時間以上の予報は客観予報でなし得るものであり、12時間以内は予報官の主観や判断によるという主張は、程度の差はあっても一致した意見のようでもあった。もう一つ感じた事は、今回の講演が天気予報を供給する側に立ったもので、果たしてユーザーの期待に応えるものであったかどうか、一寸ひっかかるものがあった。天気予報は、一般の人達を対象としているためユーザーの利用目的を確定し得ない面がある。その事が、平均的な層に対して、一方的に予報を供給している現状につながっている。ユーザーの要望やクールな目を意識しないで天気予報の将来を論じる事は、未来像も将来構想も浮き上がる恐れがあるので、ユーザーが将来何を求めどうして欲しいのか十分見極めて、その上で天気予報の将来をどうする、どうなるという具体的な議論もあってよいと感じた。現在は、米国での状況やWMOの方向を参考にしているため、地理的条件の複雑な日本での対応についての突っ込みが足りないような気もした。

今回の講演で強い衝撃を受けたのは、明治と現在を比較した予報の採点であった。予報を出すシステムも、情報量も、品質も、更には内容的にも最近は格段の進歩を遂げている。多方面にわたり、さまざまな目的に応じて予報を提供している気象庁の業務内容について、天気予報という接点だけでつながっている一般大衆の理解を得られないのは当然としても、一方では十年一日の如く、同じ形式で発表している天気予報にその一因があるような気がする。

企業が新製品を発表する時イメージチェンジを計るように、天気予報の発表形式（気圧系による説明、晴、曇というような表示の仕方）を思い切って変える工夫があってしかるべきであろう。天気ゆらぎを表現する予報形式にしたり、雨量分布の予想図を出したりして発表すれば、仮に外れた場合でも、計算機がそう出したのか、と納得してもらえらると思う。

\* S.Furuhashi, 大阪管区气象台。

マシーンの中における人間の役割という命題になると、複雑な要因があって、組織やシステムで強制的に変え得る事も有り、予報官の存在価値の議論は難しい。しかし、講演を聞くにつれて予報官の将来像をイメージとして持つ事ができたのは一つの収穫であった。

また、主観予報から客観予報に変わるだろうという予測は、私としてはそれはまたそれで異質な予報の外れを生んで、客観化された予報に対する「なれ」とか検証に時間と人間を要する事になるだろうという感じがある。結論的には、直接ユーザーに接する予報官は今後も必要で、その仕事や内容が今後10年位の間にゆっくり変わる

だろうという予想が胸の中に残った。主観予報から客観予報に変わりつつある過渡期に、それ程の混乱が見られないのは、電計が出すプロダクトの品質や精度が良くなっているためで、一定のレベルに達した現在、これから更に精度を上げる事は容易ではないだろう。若い世代の全く違った発想が、長い間主観予報の技術を確立させてきた気象人の力を上回る日が来ることを楽しみにしたい。

終わりに、この会に出席できるように計らっていただいた学会に厚く御礼を申し上げます。また、御支援をいただいた関西支部の会員の皆様には、機会を見て今回のシンポジウムの報告をさせて頂くつもりである。

## ==== 会員のひろば ====

### 日本学術会議第74回総会報告

増田善信\*\*

日本学術会議の第74回総会が、1978年1月23日～25日の3日間、港区六本木の同会議講堂で開かれた。この総会は、第11期会員選挙後初の総会で、臨時総会として開かれ、会長、副会長など役員を選出、第10期の活動報告、第11期の活動の基本方針などについて審議し、第11期活動計画委員会の設置などが決められた。以下概要を報告する。

#### 1. 役員選挙

総会の冒頭に、会長、副会長の選挙が行なわれたが、その選出方法をめぐって約1時間議論がたたかわされた。半数近くの選出された新人にとっては役員に誰が適当か分かるはずがないから各部（第1部から第7部まである）で話し合ってから投票に移るべきだ、という提案が出たためであったが、新人に対しても、選挙の時の選挙公報が全部再録されて配られるなど不十分ながらもその対策がとられていたうえ、前述の提案はある特定の人々の選挙運動になりかねないという反論が多数を占め、従来通りの方法で選挙が行なわれた。

従来の方法というのは、全く白紙のままで先ず投票し、過半数をとる者がなかったらさらに同じ方法で何回も繰り返すというもので、一見無茶な方法と思えるが、投票を繰り返すごとに段々1人に収束してくるということであった。事実、今回の選挙でも会長は1回で決まったが、2人の副会長はそれぞれ2回の選挙でスムーズに決まり、伝統というものはおもしろいものだと感じた。選挙で決まった会長、副会長および地球物理学の属する第4部（理学）の部会で選出された部の役員は、次の通りである。

会長	伏見 康治（第4部）
副会長（人文）	岡倉古志郎（第2部）
副会長（自然）	名取 禮二（第7部）
第4部役員	
部長	宮原 将平（物理）
副部長	小野 周（物理）
幹事	大森 昌衛（地質）
幹事	小寺 明（化学）

\* Z. Matsuda, 気象庁電子計算室